

ク前に二歳のこども、横に五歳のこどもを連れ野宿を重ねヨタヨタの逃避行が続く。あるときは草原で一列に並べられ荷物検査これと思うものは取り上げられてしまった。何もなくなつた。

一人千円計四千円持つて、コロ島から船へ。船底ではお粥と芋つるのすまし汁しかし内地へ帰ることで勇氣が出た。

舞鶴へ上がつて、すぐに引揚收容所へキュウリを運ぶトラックに腹ペコペコの群衆が、我先にととび上がり、もぎとつたキュウリをがりがり食べたあの惨状は今でも忘れられぬ。

脱走、三十八度線徒歩突破

宮崎県 日 高 亮 明

私は大正十五年七月渡満、撫順中学校に入學し、京城高校を昭和十年卒業して、満鉄撫順炭鉱に勤務していました。石炭は滿蒙産業發展の原動力であり、また軍の作

戦行動に欠かせないものとして増産増産で鍛えられました。昭和十九年四月結婚しましたが、六月十日に召集令状がきて、牡丹江の部隊に入隊しました。

自動車隊で、ソ満国境に資材食糧等運搬していました。その後、部隊のほとんどが南方に移動し、残留兵で新しく部隊が編制され、間島に移り、同様の作業をしていました。

終戦の詔勅は聞きましたが、誰も信じませんでした。ソ連軍が参戦し、進駐してくる朝になり、私は部隊長を乗せて運転するよう命ぜられ、十台ぐらいの護衛車と共に、知らない土地に着き、私達は部隊に戻れと言われました。私の車のみ故障して、翌日部隊に戻りますと、皆ソ連軍の捕虜になっていました。私は衛門から引き返し、ソ連兵と戦うつもりで長白山に向かいました。途中で占領された部隊の前に、うず高く積まれていた小銃、弾、防寒外とう、防寒靴、鍋、釜などを二台のトラックに積みこみました。途中で兵隊を乗せ、二十人ぐらいになりました。頂上付近に達し、二日間野営していました。が、敗戦の間違いないことを知り、皆で協議しました。

満州の家族のもとへ帰る組と、朝鮮經由で日本へ帰る組とに別れ、運転できるのは二人、私は新婚の家族の元へと思っていました。叶わず、朝鮮經由のトラックを運転することになりました。これより北朝鮮の逃避行が始まりました。凶犯の鉄橋は破壊寸前に渡り、朝鮮にはいると、邦人は皆茂山に集結するよう命令があり、ほとんど歩いて茂山に向かっていました。私達は乗れるだけの人をトラックに乗せて茂山に到着しました。

軍人はすべてソ連軍に捕虜になると聞かされ、またきた道を引き返し、景山鎮より元山方面に南下しましたが、途中でソ連軍が上陸して進駐してくることを知り、また引き返し、景山鎮の近くで別のソ連軍とバッタリ出会い（私のトラックでいっしょに進駐してくれ）と言われたので、助手と二人で左の運転台のドアを開けて断崖でしたが、飛び降りました。荷台の兵は皆捕虜となり、最後尾のバスに収容されました。途中邦人の引揚げ者といっしょになり、普通の道路は危険なので、山道ばかり歩いてきました。頂上で日が暮れてオオカミの遠声を聞きながら、夜中を過ごしたこともありました。

住民に見つかり、サイレンを鳴らし、所持品を調べられ、またあるときは日本でいじめられた元軍人の韓国人に（水も飲まさぬ）と脅かされたこともありました。しかし山を歩いているときは皆親切にしてくれ、部屋の中や土間で休ませてもらいました。同伴者は十二人ぐらいいとなり、持ち物と交換して、食事や宿を提供してもらいました。

北朝鮮は岩山が多く、食糧は乏しく、主食は粟、トウモロコシやヒエ、カボチャでがまんしたことが数回ありました。女、子どももいましたので、そのうえ、山を登ったり下ったりで三十八度線突破するまでに六十日ぐらいい歩きました。興南の近くの旅館のご主人が、息子が軍隊から除隊するまでは引揚げないと言って私達に衣類等分けて下さいましたが、出発しようとしたときにソ連兵が土足ではいってきて、フトン、毛布、貴重品等を持ち出し、残りは住民になんでも持ち出すよう命じて立ち去りました。私達は床下に隠れて難を逃れました。衣類は食糧と交換する貴重な品でしたので、旅館のご主人の好意は今でも感謝しています。

いよいよ三十八度線突破の時は、南に見える小高山に向かつて走りましたが、その時もソ連兵につかまるところを農民に教えられて難を逃れました。ぶじ西岸の海域に到着し、駅前の掃除をさせられましたが、京城まで汽車に乗ることができました。同胞のお世話で民家に止めてもらい、翌日、宮崎県の人を探していると聞き申し出ますと、(母を連れて帰ってくれ)と言われ、竜山より汽車に乗り、釜山より仙崎に上陸し、日本の土を踏むことができました。

お婆さんを高鍋町で下ろし、台風の関係で三日間宮崎市に足踏みして、十一月十日に帰郷できました。当時は就職する所はなく、在外同胞引揚者協会の事務員として、引揚げ者の援護業務にたずさわりました。敗戦当時の引揚げ者の辛苦は想像に絶するものがあり、終生忘れ得ません。引揚げ者に対する二回にわたる特別交付金支給業務も私が担当し、今も引揚げ者の老後の幸福のために心を配っています。

タバコ売りして

神奈川県 坂元 安雄

満州に生まれ育った者の根なし草の生活は、敗戦と同時に泥にまみれました。特に引揚げ後はわずかに持ち帰った家財で、間仕切った引揚げ寮の一部屋での落ちつかない共同生活、いも、かぼちゃ、ふすまの食事と飢餓感にさいなまれた経験は強く刻みこまれています。特別な辛苦とはいえません。昭和二十三年三月、本籍地鹿児島に引揚げ、子どもの私は、その翌日から食を求め、ヤミ市場をうろつき、母子家庭として、なんとか生活をやっていかねばとする気持が第一でした。

街角で立ち売りしている手巻きタバコを見たとき、大連でタバコを商売にしていた経験がこれより上手にうまいタバコをつくることができると自信がわき、急いで家に帰ってきました。

うれしくなって「お母さん、商売を見つけてきたよ」